



◀フィリピン人女性グループの番組制作の様子。自らの言葉で生活情報などを発信しています



すべての人に正確な情報を —震災復興に果たすコミュニティFM局の役割—

多言語センターFACIL

被災地における 情報発信の大切さ



東日本大震災ではラジオ放送の役割と有効性が見直されました。被災地では約20の臨時災害FM局が開局し、生活に必要なさまざまな支援情報を提供しています。その中には、被災地にいる外国人のために多言語で放送する局があります。

被災地には研修生、留学生、日本人の配偶者、日系人などさまざまな背景をもつ外国人が生活しています。こうした人たちの中には日本語が十分理解できず、必要な情報を得ることが困難なケースもありました。そこで活躍したのが多言語によるラジオ放送です。「多言語センターFACIL」では、阪神・淡路大震災をきっかけに誕生した「FMわいわい」と協力し、現地の情報発信活動をサポートしています。

FACILの理事長、吉富志津代さんたちは、震災直後から震災情報などを多言語で放送し、他のラジオ局にも利用してもらえるようにしました。4月には宮城県内の臨時災害FM放送局を訪れ、震災情報などポルトガル語や中国語などにした音声データを提供するなどしました。

被災地では現在、復旧・復興に向けた取り組みが進んでいます。吉富さんたちはラジオ放送が果たした役割を発展させ、多文化共生の視点を入れた復興のまちづくりに変化していく必要があるといいます。

新たなつながりを 生かしたまちづくり

FACILが目指しているのは「マイノリティとしての気持ちや文化を大切にしたい地域づくり」です。①多言語による情報発信、②コミュニティラジオの活用推進、③当事者のエンパワメント（一人ひとりが誰でも潜在的に持っている能力やパワーや個性を発揮できるようになること）の育成の三つを活動の柱にしています。現在、これまでの取り組みを発展させ、結婚を機にフィリピンから東北にきた女性たちを中心としたグループの活動を支援しています。

このグループは、津波で傷ついた街に花を植える活動を通じてみんなを元気にしたり、母国の言葉であるフィリピン語（タガログ語）による番組作りや放送を通じて、同じフィリピン出身の人たちの心を癒やすなど多彩な活動を計画しています。「地域の多様な出自の住民が自分らしく暮らし、地域社会の中で自分ができることを生かせる、それが本当の共生社会への一歩になります」と吉富さん。

被災地では、多言語ラジオ放送を今後も継続するところが出てきているそうです。「多文化共生」という言葉が、頭の中の理解だけで終わることなく、新しいまちづくりの核として捉えられ、あらゆる機会を生かして着実に実践されていくことを願っています。

アッティラ！

初山市太郎著（光文社）



まず、ファイブフリー
〜おすすめの一冊〜

「アッティラ」とは5世紀ごろ、中央アジアを中心に大帝國を築いたフン族の王の名前。その子孫と称する者たちがアッティラのお告げとして、キャンピングカーで突如、日本のある町に現れるところから物語は始まります。彼らは夜な夜な演奏会を開き、そこに集まってきた住民同士がさまざまなドラマを繰り広げます。また、演奏会のシーンで書かれている歌詞が印象的です。平易な言葉でつづられているのですが、どこことなく心が癒やされる感じになります。

本書には表題のほか、認知症の女性と彼女に寄り添う男性との交流を描いた「ほもよるを」、製薬会社に勤めるOLとその夫とのやり取りが面白い「マルチャペル」の二つの短編を収載しています。